

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

所在地 長野県長野市南長野字幅下692-2
管理機関名 長野県教育委員会
代表者名 教育長 原山 隆一 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月1日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 長野県長野高等学校

学校長名 原 良通

3 研究開発名

観光を核にした国際都市NAGANOを担うグローバル・リーダーの育成

4 研究開発概要

普通科教育に探究活動を導入し、思考力・判断力・表現力の育成に資する学習形態を研究すると共に、グローバル・リーダーに求められる論理的思考力及び発信力の育成に有効な教育課程を研究開発した。学校設定教科「SGH」を設け、総合的な学習の時間を「長野のグローバル戦略を探る」等に編成し、成果を発信する国際的な機会を設けた。

本年度は、第3回となる「善光寺グローバルサミット(3年選択生企画・運営)」において、地域への政策提言・全校生徒によるディスカッションを行った。加えて、ゲストからの発信の機会を増やし、サミットらしく様々な意見が飛び交う場になった。1年次の課題研究では、これまでの指導法をマニュアル化する動きが進み、授業担当者を変更しても成果の継承がスムーズに行われた。また、2年次は、課題研究において班担当者の指導力向上が見られ、生徒の活動に対する評価も確実に上昇している。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) SGH運営指導委員会：SGH関連授業参観、取組の概要説明、意見交換及び指導

① 第1回 平成30年8月27日(月)(於：上田高等学校)

② 第2回 平成30年11月5日(月)(於：長野高等学校)

③ 第3回 平成31年2月9日(土)(於：上田駅前ビルパレオ)

(2) 拡大SH会議：平成30年9月27日(木) 会場：長野県庁

次年度の文部科学省の新規事業指定を目指している高等学校長が、SGH・SPHの指定校の学校長より指定事業の立案・運営方法に関して報告を受け、意見交換。23校が参加。

(3) 「探究的な学び」研究会：平成30年11月12日(月)(於：長野県総合教育センター)

全県立高等学校の学習指導担当者が集まり、SGH・SPH・SSH指定校のカリキュラム開発の軌跡について学び、自校の「探究的な学び」の構想につなげる研修会を県教育委員会の主催で開催。

(4) 21世紀型教育モデル校設置：21世紀型教育の開発を行う高校をモデル校に指定し支援。

(5) SGH校取組の紹介：運営指導委員会についての広報、SGH事業について県民への周知。

(6) ICT環境整備：全教室ICT環境整備 リース契約で約400万円支援

電子黒板及び実物投影機の普通教室への整備・探究学習用 PC42 台・WEB 会議システム 1 式・無線アクセスポイント 2 台・ICT 支援員派遣(10 回程度)

(7) グローバル講師・ALT 配置 約 960 万円

ALT 1 名に加え、高校で教えた経験のある外国人講師を 1 名 独自に雇用。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 課題研究「長野のグローバル戦略を探る」	←————→											
② 課題研究「世界から見た長野のグローバル戦略」	←————→											
③ 課題研究「今後の長野のグローバル戦略」	←————→											
④ 課題研究中間発表会										↔		
⑤ 課題研究発表会(善光寺グローバルプレサミット)							↔					
⑥ 善光寺グローバルサミット				↔								
⑦ 「グローバル経済」	←————→											
⑧ 「英語プロジェクトⅠ」	←————→											
⑨ 「英語プロジェクトⅡ」	←————→											
⑩ 台湾研修								↔				
⑪ 台湾研修下見					↔							
⑫ 訪日台湾高校生とのワークショップ			↔									
⑬ 米国リーダー研修												↔
⑭ 小布施サマースクール実行委員との交流		↔										
⑮ 英語 HP 作成	←————→											
⑯ SGH 研究協議会											↔	
⑰ SGH 研究報告書												↔
⑱ SGH 評価委員会											↔	
⑲ SGH 運営指導委員会							↔	↔			↔	

(2) 実績の説明

年間を通じて SGH の教育課程を履修した生徒 576 名 (1・2 年生全員, 3 年生 16 名)

年間を通じて善光寺グローバルサミット等, SGH の学びを行った生徒 839 名 (全校生徒)

①課題研究「長野のグローバル戦略を探る」 (総合的な学習の時間) 1 学年全員 1 単位

◆授業内容

ア) オリエンテーション「世界に通用する力と学び」 4/14(土)

イ) 課題研究概論・興味の発見とリサーチ 5/18(金), 5/22(火)~5/24(木)

ウ) ディスカッション講座 6/22(金)

エ) インタビュー実践事前学習 7/21(土), 23(月)

オ) インタビュー実践 7/24(火)

3 部構成。1 部, 2 部では連携先の県内 NPO 法人, 企業, 自治体等から講師を招き 14 講座を

開設。生徒は部ごとに異なる講座を選択。3部では各講座会場に張り出された質疑のやりとりを記録した模造紙を見学。

- カ) インタビュー実践報告会 7/25(水)
- キ) テーマ設定, 班編成 8/28(火), 9/5(水), 6(木)
- ク) フィールドワーク I 事前学習
10/9(火)~11(木), 10/23(火)~25(木), 11/6(火)~8(木)
- ケ) フィールドワーク I 11/13(火)
- コ) フィールドワーク I まとめ 11/15(木)
- サ) 中間発表会準備 12/4(火)~6(木), 15(火)~17(木), 1/21(月)
- シ) 課題研究中間発表会 2/12(火)~14(木)
- ス) 班担当教員への報告 12月~2月
- セ) 校内フィールドワーク 12月~2月

②課題研究「世界から見た長野のグローバル戦略」(総合的な学習の時間) 2学年全員 1単位

◆授業内容

- ア) オリエンテーション「2学年課題研究について」4/10(火)
- イ) SGH 講演会「グローバルな視点に立った効果的なプレゼンテーション」4/14(土)
立命館アジア太平洋大学 大学院 経営管理研究科 客員教授 牧野浩文氏による講演
- ウ) テーマ設定, 班編成 4/11(水), 12(木), 24(火)~26(木), 5/1(火)
- エ) フィールドワーク II 事前学習
5/2(水), 8(火), 10(木), 29(火)~31(木), 6/12(火)~14(木)
- オ) フィールドワーク II 中心日 6/22(金) 午後
- カ) フィールドワーク II まとめ
- キ) フィールドワーク III 事前学習 } 6/26(火)~28(木), 7/17(火)~19(木)
- ク) フィールドワーク III 7/24(火) 終日
- ケ) フィールドワーク III まとめ 7/25(水)
- コ) 研究報告個人レポート作成 7/25(水)~8/25(土)
- サ) 発表会準備 8/29(火), 30(水), 9/4(火), 11(火)~13(木), 27(木), 10/2(火), 3(水)
- シ) 課題研究発表会(善光寺グローバルプレサミット) 10/4(木)
- ス) 課題研究発表会総括 10/30(火), 31(水), 11/22(木)
- セ) 研究論文作成
11/20(火)・21(水), 12/11(火)~13(木), 1/10(木), 22(火)~24(木), 29(火)~31(木)
- タ) 班担当教員への報告 随時

③課題研究「今後の長野のグローバル戦略」(総合的な学習の時間) 3学年選択者 16名 1単位

◆授業内容

- ア) 研究計画 4/5(火), 4/23(月)
- イ) グローバル NAGANO 戦略会議(中間発表)準備 5/7(月), 26(土)
- ウ) グローバル NAGANO 戦略会議(中間発表) 5/28(月)
- エ) 善光寺グローバルサミット準備 6月~7月
- オ) 善光寺グローバルサミット 7/5(木)・6(金)
- カ) 英文報告書作成 7月~9月

④課題研究中間発表会 1学年全員(全56班による発表, 討論, 外部講師による講評)

- ◆日程 2月12日(火) 1・2時限(8:35～10:35) 1年1・2組
- 2月13日(水) 1・2時限(8:35～10:35) 1年3・4組
- 2月14日(木) 1・2時限(8:35～10:35) 1年5・6組
- 3・4時限(10:45～12:45) 1年7組

⑤課題研究発表会（善光寺グローバルプレサミット） 1・2学年全員（発表は2年生全66班）

◆日程 10/4(木)

- ア) 12:50-14:05 分散会。17会場、66班がプレゼンを行い、1・2年生が全員参加して討論を行った。
- イ) 14:25-16:05 全体会。一次・二次審査により選出された3班がプレゼンを行い、外部講師による審査で最優秀賞を決定。講師講評を行った。

⑥善光寺グローバルサミット 全校生徒（発表は3年SGH選択生17名）

◆日程 7/5(木)・6(金)

- ア) 7/5(木)第一部 13:30～21:00 善光寺白蓮坊にて合宿交流会
- イ) 7/6(金)第二部 8:50～10:50 本校体育館にて発表会・討論会

⑦「グローバル経済」 SGH 学校設定科目 1学年全員 1単位

◆実施方法と内容

- ア) 世界史の「世界の一体化」「グローバル化」を学習するのと並行し、グループ学習等でグローバル化に伴う諸課題について探究し主体的な問題意識の涵養を行った。
- イ) グローバル講演会 I 「JICA での活動を通して」
千葉県山武市教育委員会 生涯学習課 山崎 豊氏 8/25(土)
- ウ) グローバル講演会 II 「学ぶことについて」「グローバル人材の要件」
立命館アジア太平洋大学教授 横山研治氏 12/8(土)

⑧「英語プロジェクト I」 SGH 学校設定科目 1学年全員 1単位

◆具体的な取組

- ア) 自己紹介プレゼンテーション
- イ) Self-Education Presentation in English (中間発表会) 9/30(土)
- ウ) アカデミック・ディベート

⑨「英語プロジェクト II」 SGH 学校設定科目 2学年全員 1単位

◆具体的な取組

- ア) コミュニケーション・トレーニング「My Favorite Presentation」ICT 学習
- イ) 「グローバル・イシュー」プレゼンテーション&台湾研修アカデミック・プレゼンテーション
- ウ) パーラメンタリー・ディベート
- エ) エッセイライティング・ワークショップ

⑩台湾研修 2学年全員 11月11日(日)～15日(木) 4泊5日

- | |
|--------------------------------------|
| 11/11(日) 学校 ⇒ 羽田空港 ⇒ 台北松山国際空港 |
| 11/12(月) クラスごと7高級中学での国際交流(課題研究発表と討論) |
| 11/13(火) 台湾東南部フィールドワーク・台北フィールドワーク |
| 11/14(水) 台北市内および台北校外フィールドワーク |
| 11/15(木) 台北松山国際空港 ⇒ 羽田空港 ⇒ 学校 |

⑪台湾研修下見 8月に実施

⑫米国リーダー研修 1年選抜者40名

3/9(土)～15日(金) 5泊7日

3/9(土) 学校 ⇒ 成田空港 ⇒ ボストン
3/10(日) ハーバード大学での交流事業(課題研究発表・テーマ別ディスカッション)
3/11(月) MIT研修 ⇒ ボストン市内研修 ⇒ ニューヨーク
3/12(火) ミルバーン高校での交流
3/13(水) ニューヨーク市内班別フィールドワーク ⇒ 国際連合本部研修
3/14(木) ニューヨーク ⇒ JFK空港 ⇒
3/15(金) ⇒ 成田空港 ⇒ 学校

⑬小布施サマースクール実行委員との交流 5/14(木)

⑭訪日台湾高校生とのワークショップ 1・2学年関係生徒100名

高雄市瑞祥高級中学との交流 5/24(木)

⑮英語ホームページの作成 年間を通して整備

⑯SGH 研究報告書 3月に作成

⑰SGH 評価委員会 2/4(月)

⑱SGH 運営指導委員会 *「5 管理機関の取組・支援実績」を参照

(3) 成果の普及のための取組

①取組の内容

◆発表会の公開：善光寺グローバルサミット第2部全体会，課題研究発表会（善光寺グローバルプレサミット）分散会・全体会，課題研究中間発表会，米国リーダー研修報告会

◆職員研修会：課題研究及び海外研修旅行についての職員研修会 6/22(金)《全県に公開》
高大接続改革研修会 7/26(木)《全県に公開》

◆実践報告

ア)平成30年度第1回スーパーグローバルハイスクール連絡協議会

分科会〈第一部〉におけるカリキュラム研究開発事例発表(主催：文部科学省・筑波大学附属学校教育局) 6月29日(金)

イ)「探究的な学び」研究会(主催：長野県教育委員会) 11月12日(月)

ウ) e-スクールステップアップ・キャンプ2018「東日本大会」2月2日(土)

エ)『教育指導時報』835号，2019年3月刊 発行元：長野県教育指導時報刊行会

オ)平成30年度 第1回北信越SGHフォーラム 3月15日(金)

期日：3月15日(金)

会場：石川県青少年総合研修センター

◆ホームページ(日本語版・英語版)：SGHブログによって日々のSGH事業に係る情報発信をする。

◆学校訪問受け入れ：台湾・高雄市立瑞祥高級中学(他数校選抜者)，千葉県立東葛飾中学校・高等学校高等学校、千葉県立松戸国際高等学校，群馬県立富岡高等学校，群馬県総合教育センター，富山県立高岡西高等学校，福島県立橘高等学校，富山県立富山南高等学校青森県立弘前高等学校，新潟県立国際情報高等学校，富山県立高岡高等学校，神奈川県立緑ヶ丘高等学校

◆報道：新聞報道1件，ニュース報道1件

- ②成果：協働的なスタイルで全員対象の課題研究学習を進める高校が県内外でも増えてきた。そこで課題となっているのは、研究テーマの設定方法や班の編成方法、多くの生徒を一斉に指導するための工夫、評価方法などである。これらは本校が試行錯誤しながら一定の解決策をうみだしてきた課題であり、本校の実践報告が多くの高校にとって意義をもち、社会的にも注目されるものであることが明らかになってきた。

7 目標の進捗状況, 成果, 評価

研究開発の仮説 1

長野県の特徴的な地域活動や海外研修に参加し、長野県行政や企業と協働してグローバル戦略を推進する探究的な活動により、主体的な学びの姿勢とグローバルに考え活動する力を育成できる。

研究開発単位 I 課題研究教育課程の開発

(1) 進捗状況 上記の通り

(2) 成果

① 1, 2 年生のカリキュラムが、主体的な学びの姿勢を着実に伸ばしている。

積極的に意見を表明できて、社会に主体的に関わろうとする生徒が増えていることが、校内の様々な活動で垣間見える。今年度は、2 年次後半まで自主的に課題研究を続ける生徒が増えてきている。

② SGH カリキュラムにより、グローバルな意識が高まり、グローバルに考え行動する生徒が増えつつある。

昨年同様、米国・台湾研修旅行は生徒に高い教育効果を上げている。今年度は、「グローバルに考え行動する」生徒がさらに増えている。卒業後の進路・キャリアにも大きく影響することが予想される。

③ どの教員でも課題研究の指導ができる体制が整いつつある。

長野高校を始め、多くの公立高校は人事異動もあり、長期間にわたり同一担当者がプログラムを続けていくことは出来ない。昨年度末まで中心に活動してきた管理職や担当者が転勤になり、昨年までの内容を継続・改善していくことが今年度の大きな課題であった。そんな中、マニュアル化や職員の協力体制で、今年度それぞれの活動を継続・発展させることができた。SGH 活動が校内に根付いたことを実感できる 1 年であった。

④ 3 年 SGH 生「善光寺グローバルサミット」での改善が、外部からの高評価に繋がった。

一昨年度は、提言が課題解決の「方法論」に関するもの、昨年度は「政策提言」の形ができた。今年度は、前年度までの流れを踏まえ、3 つの政策提言に加え、「新しい社会のあり方」というテーマの下、未来からの視点で現在の長野を見るというコンセプトで全校討論を行った。全体の進行やプレゼンテーションの中に劇を入れ、事前に配った付箋に意見を書いてもらい意見を回収する参加型ディスカッションを行った。外部から、プレゼンテーションとディスカッションに高い評価を受けた。

⑤ 多くの教科・科目が、ICT を活用するとともに、SGH 事業で変容した生徒に対応した授業を行っている。(中間報告における評価コメント「総合的な学習の時間で育んだ資質・能力の他教科でも発揮していくことが期待される」を受けた取組である。)

主体性及び協働して学ぶ力が高まった生徒の変容への対応として、多くの教科がグループワークやディスカッションを授業で試みている。SGH 事業の推進と並行して進められた ICT 環境についても、ほとんどの教員が対応している。生徒の主体性や発信力をベースに授業を組み立てるようになってきている。

(3) 評価

- 平成 31 年 2 月に実施した学年全員を対象にしたアンケートでは、「人前で意見を表明する力が付いてきた」と考えている 1 年生は、過去 5 年で最高の 43.1% に上った。2 年生は、35.8% であったが、1 年次の 29.1% から 6.7 ポイントの上昇が見られた。「社会貢献をしたいか」という質問にも、1, 2 年生とも同様の傾向が見られた。

- ・自主的に海外に行く生徒は、過去5年間で最多の年間14名。在学中に自主的な留学や海外研修に行きたいと考える1年生は、68.7%に上った。(37.3%だった5年前から、31.4ポイント上昇している。)
- ・総合の授業が全体としていい授業だったかの質問に、1年生は76.3%が「良い」「ほぼ良い」と回答(37.2%だった5年前から39.1ポイント上昇)、2年生は74.5%が「良い」「ほぼ良い」と回答(45.5%だった5年前から29ポイント上昇)している。いずれも、過去5年で最も高い数値である。
- ・3年生善光寺グローバルサミットでは、参加者の約65%が今後の参考または意義を振り返る機会になったと回答。ゲストの満足度も上がり、改善が見られた。
- ・教員のICTスキルも高まり、電子黒板を使うスキルについて、95%の教員(5年前から本校にいる20名のうち)が上がったと回答しているように、日常的に使用されている。
- ・榎本氏のアンケート分析によれば、課題研究が「好き」「どちらかといえば好き」と答えた56人中、50%にあたる28人が複数回、海外に渡航しており、約21%に当たる12人は週一回以上の日常的な外国人との交流も行っていた。一方、「嫌い」「どちらかといえば嫌い」を選んだ20人の中では、複数回渡航は3人、日常的な交流は3人となった。このことから、グローバルな学びの経験値と課題研究に相関があることが明らかになったと思われる。

研究開発の仮説2

課題研究の成果を英語によってプレゼンテーションしたり、海外研修でワークショップ、フィールドワークやレポート作成を行ったりすることを通して、異文化理解力、コミュニケーション能力、発信力及び海外でも通用する英語力を鍛えることができる。

研究開発単位Ⅱ－(A) 海外等研修

研究開発単位Ⅱ－(B) コミュニケーション能力向上のための教育課程の開発

(1) 進捗状況 上記の通り

(2) 成果

①異文化理解力、コミュニケーション能力、発信力及び海外でも通用する英語力を鍛えるカリキュラムが整備された。

長野高校では、情報と英語を融合した科目である「英語プロジェクトⅠ、Ⅱ」、半年に及ぶリーダー育成プログラムで準備する「米国研修(選抜者40名)」,280名全員が主体的に動くプログラム「台湾研修旅行(2年生全員)」という、「異文化理解力、コミュニケーション能力、発信力及び海外でも通用する英語力を鍛えるカリキュラム」を完成することができた。どのカリキュラムも着実に成果を伸ばしている。

②グローバルな学びと課題研究の嗜好生の相関が明らかになり、仮説2の妥当性が証明された。

元JICA職員で、現在、東京大学大学院で研究を行う榎本智恵子氏は、アンケート結果から、長野高校の課題探究学習を推進する際に海外体験や外国人との交流体験が有効に働いていると考察した。長野高校が仮説1で設定した「主体的な学びの姿勢とグローバルに考え活動する力」の育成のために、海外研修の充実へのアプローチを仮説2として設定したことが妥当だったことが明らかになった。

(3) 評価

- ・英語プロジェクトⅠでは、英語力、コミュニケーションスキル、情報活用スキルの向上に意義を感じた生徒が67.0%で、昨年よりも21.7ポイント上昇した。
- ・米国研修において、学校でのプレゼンテーション、現地校との交流、企業訪問に対して、ほぼ100%の生徒が有意義だと感じており、様々な意欲や能力の高まりを表明している。
- ・英語プロジェクトでは、Googleを活用すると共に、ディスカッション・ファシリテーションの授業を繰り返すことにより、多くの班が台湾での交流を成功させた。その結果、グローバルな問題への意識が高まった(70.0%)、高校や大学で学ぶ意欲が高まった(80.5%)など、意欲や能力の向上が見られる回答が増えた。
- ・職員へのアンケートからも、よくわからないと回答した10%を除く、全90%の職員(5年前から本校にいる

20名のうち)が英語でのプレゼン能力の上昇を感じている。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

*平成28年度入学生用教育課程表。数字は単位時間数(50分換算の授業時間数/週)を示す。

学年	国語総合		世界史A	現代社会	数学I	数学II	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術(音楽・美術)	英語I (コミュニケーション)	英語表現I	家庭基礎	SGH グローバル経済		総合的な学習の時間
	5	2														1	4	
2学年	現代文B	体育	保健	芸術	英語II (コミュニケーション)	英語表現II	古典B		地歴8 (世B・日B・地Bから2科目)				数学II	数学B1	地学基礎2	SGH グローバル経済	総合的な学習の時間	
							4	3	4	2	1	2						1
3学年	体育	英語III (コミュニケーション)	英語表現II	現代文B	古典B	地歴・公民6 (世・日・地・倫・政から2科目)			数学A	数学B	理科基礎探究4 (化・生・地から2科目)		芸術1	総合的な学習の時間				
						3	3	3			3	3			4	1		

○普通科の生徒全員が取り組む探究活動を導入し、グローバル・リーダーに求められる論理的思考力及び発信力の育成をはかる教育課程を研究開発した。学校設定教科「SGH」を設け、総合的な学習の時間を「長野のグローバル戦略を探る」等に編成し、長野の地域力も含めた学校の持つリソースを活かして、活動の成果を発信する国際的な機会を設けた。初年度は、できるだけ生徒の多様な興味関心に沿うように7クラスを同時開講していたが、十分な指導が出来たとは言えなかった。そこで、第2期入学生以降は指導体制を整備するとともに、2クラス同時開講の形式を開始し、教科担当・班担当として全職員が関わる指導体制が完成した。

○学校設定科目「英語プロジェクト」は、情報と英語を融合したプロジェクト型学習として英語の発信力を養成してきた。同じく「グローバル経済」は、有識者の講演や社会問題をグローバルな切り口で扱う授業により、グローバルな視点を養う。

○平成30年度SGH連絡協議会連絡会にて、第一部発表校として以下の報告を行った。

■全校生徒が探究型学習を実践 ～2コマ連続「総合」と学校設定科目「英プロ」 通年実施で可能に
 長野高校では、SGH指定翌年の平成27年度から、1,2年生対象で2コマ連続、110分の総合的な学習の授業を隔週で行っている。(長野のグローバル戦略を探る・世界から見た長野のグローバル戦略) 全校生徒対象の課題研究実践を目指す授業である。通常の時間割に2コマ連続の総合授業を取り入れることで、まとまった時間が確保され、1回の授業で、「協働的な学び」に基づいたプログラムと「探究的学習」を実践するプログラムを連動させた授業が展開できる。例えば、前半でブレストとディスカッション、後半でPCを使ったりサーチとワークシート作成といった効果的な組み合わせである。本校が個人、グループの両方の課題研究を深めていく特徴が出せるのも2コマ連続授業の賜である。

さらに全員必修の学校設定科目「英語プロジェクトI,II」(通称「英プロ」)は、情報の授業内容を踏まえつつ、英語での発信力を育成するプログラムである。海外の高校生との共有スライドを用いたプレゼンテーション共同制作を通じて、グローバル社会でのICTを有効活用した協働性を体験的に学ぶ。ALT・グローバル講師(県独自採用)、英語科職員で企画する。積極的な交流姿勢を育成し、海外とのインターネット交流と訪問交流を後押ししている。これは、主体性の育成にも役割を果たしている。

■授業と連動して主体性育成の場を提供する

長野高校のSGH活動は「社会に対する主体性」の育成を目指している。そこで、主体的に関わりたくなる「場」の提供が重要になる。

課題研究の情報収集として実施しているフィールドワークがこの「場」にあたる。1年次11月(終日)2年次6月(半日)7月(終日)の3回を保証している。長野高校では、総合的な学習の時間の授業内に、生徒たちが自ら訪問場所を探し、アポイントをとり、質問内容を考え研究に活かしていく。教員は、締め切り設定、トラブル対応というマネジメント、相談を必要とする生徒への助言という、生徒の主体的な活動のサポートにまわる。ここでは、全職員により組織される班担当制度が機能している。そして、何より、「長野」(県及び市)というコミュニティの持つ社会教育への情熱と寛容さに支えられている。

台湾での発表活動も主体的に関わりたくなる「場」の提供である。11月に4泊5日、学年全員280人で行う台湾研修旅行では、台湾・高雄市教育局の全面協力の下、7クラスが現地の7高級中学を訪問交流する。生徒たちの主体性を引き出す企画である。教員側は現地との調整に加え、「1対1パートナー」「交流グループ」を作り、それぞれが連絡を取り合えるような環境を提供する。相手校には、長野高校が主導する形で発表することを認めてもらった上で、生徒同士が話して、部屋ごとの発表の形式を決める。このプロセスを「英プロ」で行う。このように、グローバルなプロジェクトに主体的に関わる場を生徒に提供する。

■独自のプログラム・教材開発と成果の普及

集中的にスキル養成を行うため、1年生については、夏季特編授業等を活用して、短期集中プログラム「インタビュー実践」を行う。講師を呼んでインタビューを行う1日とその前後の準備と振り返りの授業で構成される学習である。このプログラムは、大幅にカリキュラムを変更できない学校でも、課題研究導入に使えると思われる。

主に2年次から始める海外研修の発表準備は、課題研究のテーマを台湾でのプレゼンテーションに落とし込み、英語による討論を体験する。そして帰国後、実体験をエビデンス化する所までを一連の流れとしている。長野県では、本校の海外研修を参考に台湾で交流を行う高校が増えてきた。これからも情報教育と英語を組み合わせることで他校においても実践が可能なプログラムを開発して行きたいと考えている。

○中間評価を踏まえた仮説の検証と各カリキュラムの取り組み

文部科学省からの中間評価(平成28年度)では、「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される。(A評価)」と高く評価されている一方で、「総合的な学習の時間で育んだ資質・能力を他教科でも発揮していくこと」「卒業生ネットワークなどを活用し、より多くの企業などとも連携しながら実践の機会の拡充を図ること」を課題として示されている。翌29年度以降の取組を中心に、仮説ごとに対応する活動をまとめた。

<研究開発の仮説1>

長野県の特徴的な地域活動や海外研修に参加し、長野県行政や企業と協働してグローバル戦略を推進する探究的な活動により、主体的な学びの姿勢とグローバルに考え活動する力を育成できる。

<仮説1についての総括(検証)>

長野市近郊中心に少人数で直接訪問先と交渉する形式のフィールドワークや米国・台湾での発表活動を伴う海外研修に参加し、それぞれの場で得た体験と情報に基づく探究的な活動により、主体的な学びの姿勢とグローバルに考え活動する力の育成が可能であることが検証されるとともに、長野高校に大きな成果と人的リソースの再結集をもたらした。

仮説1に関するカリキュラム グローバルに考え活動する力の育成に係る実践(課題対応箇所に波線)

A)「長野のグローバル戦略を探る」(総合的な学習の時間)

- 平成28年度より、探究的な学びに必要な不可欠な「基礎スキル養成カリキュラム」を開始。年次ごとに見直しが行われた。28年度ブレインストーミング(ブレスト)開始、29年度ディベート講座をディスカッション講座に変更、同じくバスでのフィールドワークを校内実施のインタビュー実践に変更し、年々教育効果は高まっている。30年度には、マニュアル化され、方法論が校内で継承されるとともに、県内外の他

校にも普及している。

- ・その中でも柱となるインタビュー実践は、20人規模の講座で講師との対話の場を設けることで、その教育効果が高められた。講師招聘には、大学や企業のネットワークを最大限活用した。スキル養成にふさわしいと思われる14名を選定した。平成30年度は、SGH第1期の卒業生も講師として参加し、SGHの学びや大学での実践について語った。
- ・中間発表会においては、卒業生ネットワークを活用して、慶応義塾大学総合政策学部教授清水唯一朗氏を呼ぶなど、近隣以外からも有識者を呼ぶことができた。また次年度以降コンソーシアムとしてSGH事業で開発した内容をともに発展させていく、東京海上日動、長野県立大学、信州大学を含む、多くの企業などと連携して、研究発表の場を創り出した。
- ・今年度、担任が課題探究に深く関わる場面が多く見られ、しばしば効果的に研究が深まっていた。全校指導体制が進化している。
- ・平成30年度からは、総合的な学習の時間で育んだ資質・能力を他教科でも発揮していくことを目指し、世界史、生物、保健、家庭科の授業では、リサーチに基づく研究を発表する場を設けていたが、その影響は1年生の課題設定にはっきりと現れていた。

B) グローバル経済

- ・世界史的視点でグローバル化を扱う授業。今年度の講演会でも、卒業生のネットワークを活用。直接講師を依頼するだけでなく、講師のアレンジをしてもらう機会があった。30年度12月の講演会では、本校卒業生で立命館アジア太平洋大学大学院経営管理研究科客員教授牧野浩文氏に講師をアレンジしてもらい、立命館アジア太平洋大学横山研治副学長を、大分県から招くことができた。（この訪問をきっかけとして、平成31年度からは、同大学との間で連携協定を予定している。これも卒業生のネットワーク活用による成果である。）ワークショップ形式の講演が多く、議論の素養が高まった本校においては、質疑応答も白熱して、講師からも高い評価をもらうことが多かった。

C) 「世界から見た長野のグローバル戦略」（総合的な学習の時間）

- ・1期生が2年生になった平成27年度は学年単位で行った。2年目になる28年度以降は、クラス替えを受けて2クラス混合のグループづくりを行っている。
- ・ICT環境やデータが充実するにつれ、年々授業に対する生徒からの評価は高まってきた。
- ・年々、フィールドワークが拡充している。生徒の興味関心をできる限り尊重して、フィールドワーク先を増やしてきた結果、より多くの企業などと連携でき、生徒たちの1次情報収集実践の場を創出することができた。
- ・平成30年度は、2年次最初の講演会（プレゼンテーション講座）の講師を、本校卒業生である立命館アジア太平洋大学牧野浩文氏に依頼。情報を効果的に伝えるプレゼンテーションについての指導を受けた。
- ・英語プロジェクトを担当するグローバル講師に総合的な学習の時間も担当してもらい、課題設定の段階から生徒と連携を取った。これにより、昨年以上に、英語プロジェクトとの連続性が生み出された。
- ・今年度は特に担任が課題研究に深く関わる場面が多く見られ、学校としての全校指導体制が有効に機能していた。

D) 「今後の長野のグローバル戦略」（総合的な学習の時間）

- ・1期生が3年生になった平成28年度から開始。初年度から人数こそ少ないものの意欲の高い生徒が授業を選択し、SGH活動で養うべき「4つのチカラ」を提言。
- ・平成29年度には、2期生が政策提言並びに全校ディスカッションを行った。平成30年度同じ形を踏襲した。
- ・平成28年度から行っている有識者からアドバイスをもらう機会である「グローバルNAGANO戦略会議」に加えて、平成29年度からは、より多くの企業などと連携しながら、研究に必要なフィールドワークの機会を提供した。

<研究開発の仮説2>

課題研究の成果を英語によってプレゼンテーションしたり、海外研修でワークショップ、フィールドワークやレポート作成を行うことを通じて、異文化理解力、コミュニケーション能力、発信力及び海外でも通用する英語力を鍛えることができる。

<仮説2についての総括（検証）>

5年間の事業を通じて、「異文化理解力、コミュニケーション能力、発信力及び海外でも通用する英語力を鍛える」に資するカリキュラム「英語プロジェクト」、「米国研修」、「台湾研修」を開発することができた。

仮説2に関するカリキュラム 異文化理解力、コミュニケーション能力の育成に係る実践（課題対応箇所^①に波線）

E) 英語プロジェクト I

- ・英語発信力養成を主な目的としたプロジェクト型の授業。9月の発表会を目指して準備をする。またスキルアップのためにディベート等のタスクを担当者が企画して実施する。課題研究や台湾での交流に必須になる Google の使い方を含む、情報機器活用もこの授業で扱う。
- ・初年度以来、発表会には、連携先である信州大学工学部ポーリンカワモト准教授等を通じて、大学の学生、教員、企業関係者がコメンテーターとして参加。毎年、30人近くに参加頂いてきた。大学のみならず、株式会社電算、株式会社エーシーエーなど企業からもご参加頂いている。
- ・今年度は、本校卒業生で、地元信州大学教育学部に進学した SGH 1 期生 3 名も参加。 コメンテーターとして、高校時代の経験を踏まえてコメントしていた。

F) 米国リーダー研修

- ・初年度に当たる平成 26 年度に大宮透氏が中心になり企画。ハーバード大学でのプレゼンテーション、MIT 見学、ミルバーンハイスクールとの交流など、今年度まで引き継がれている基盤を築いた。
- ・昨年度から、事前学習を含むメニューを踏襲して、本校職員とグローバル講師で連携して行っている。
- ・平成 29 年度より、ニューヨークの大手会計事務所で活躍する本校 OB 中島孝明氏（その後長野県が『グローバルNAGANO推進アドバイザー』を委嘱）のネットワークを活用して、ニューヨークで活躍する各界の現地法人と交流を実施。生徒の満足度も高く、教育効果も高いプログラムであった。

G) 英語プロジェクト II

- ・1期生が2年生になる平成 27 年度より実施。台湾における学校交流で英語でのプレゼンテーションをゴールとしたプロジェクト型学習。
- ・事前に台湾の訪問校の生徒と ICT 交流を開始。1対1のパートナーと交流グループを決め、メールやコメントのやりとりをする。現在まで同じ形式で行っているが、2年目からは相互発表、3年目からはディスカッションと年々目標を高く設定することで、高い緊張感を持って取り組んでいる。
- ・高雄市政府教育局に、訪問交流する学校とのコーディネートを行ってもらっている。8月に、教育局を訪問する本校教科担当者が、その場に集まった交流先7校の代表者と調整会議を行い、各校との事前交流窓口が確定する。高雄市政府教育局は、このプロジェクトを支える重要な連携先である。

H) 台湾研修旅行

- ・1期生が2年生になる平成 27 年度より実施。7校へクラスごと分かれての交流と、バラエティーに富んだフィールドワーク先を特長とした研修旅行で、初年度から、長野県から「21世紀型モデル修学旅行」と指定を受けるとともに、観光課を中心に支援を受けている。
- ・平成 29 年度からは、海外フィールドワーク先に企業を加えた。そのうちの一つであるフージンツリーでは、特に満足度の高いプログラムが完成している。昨年度の2社に加えて、今年度はさらにもう1社の長野県企業に訪問した。

1) 訪日生徒受け入れプログラム

- ・SGH 指定以来毎年、台湾・オーストラリアなどの高校生を受け入れ、交流を図っている。
- ・平成 29 年度は、高雄女子高級中学 100 名を受け入れた。今年度は、瑞祥高級中学を中心とした高校生訪問団を受け入れた。これは、高雄市での高校生プレゼン大会優秀者を連れて成果報告するための旅団で、日本での発表を数年来の交流がある「長野県」「長野高校」でと、先方が希望したことにより実現したものである。4 年間、高雄市政府教育局とのネットワークを活用して、「高雄市 7 校との訪問交流」を続けてきたことで、長野高校は ICT 教育・グローバル教育において高雄市で高い評価を得ているものと考えられる。

(2) 高大接続の状況について

OSGH 活動を通じて、難関国公立大学が求める能力を育成できる。

本校は地域のトップ校として、難関大学への進学が生徒・保護者・地域から求められている。平成 26 年度(2014 年)SGH 事業の開始当初、生徒に加重な負担となり、進学へ悪影響があるのではと懸念されていた。以下の表を見る限り、過去数年間と比べても遜色なく、第 1 期生の東京大学現役合格者数などは、過去 10 年でも最大の 9 人であった。また 3 年生の SGH 対象生からは、2 年続けて東京大学に複数合格している。東京大学の推薦に限ると、過去に合格した 3 名は、いずれもスタッフリーダーや米国研修リーダーなど、SGH 活動で明らかな活躍をした生徒であり、当然 SGH 活動をエビデンスとして提示して合格している。高校接続改革が求める「新たな価値を創造していく力」を正当に評価してもらえたと考える。

また、「平成 31 年度大学入試センター試験」では、英語(Listening 含む)で、95%以上の得点を取った生徒の割合は、SGH 対象外生徒 7%に対して、SGH 対象生徒は 31%であった。CEFR レベルに置き換えて考察すると、ほとんどの本校生徒は CEFR レベル B1 以上であると思われるが、難関大学受験に有効と思われる B2 以上の英語力の有無を考えた時には、SGH 対象生徒の方がその力を持ち合わせていることがうかがえる。3 年次まで SGH を継続することは、現状の大学入試に対しても、少なからずプラスの方向に作用している。

卒業年度 平成	現 役 国 公 立 合 格 者 数	難 関 国 公 立 と 医 学 部 合 格 者 数 * (地 域 枠 以 外 の 推 薦 入 学 者 数)	難 関 国 公 立 と 医 学 部 へ の 推 薦 入 試 受 験 者	現 浪 東 大 合 格 者 数	現 役 東 大 合 格 者 数 (推 薦)	合 格 者 の 中 の 3 年 選 択 者 数	SGU 大 学 へ の 進 学 (現 浪 合 計)
24 年 度	102	42 (6)	16	8	3		
25 年 度	77	34 (2)	10	9	4		
26 年 度	96	36 (3)	12	8	2		
27 年 度	123	55 (5)	14	10	6		
28 年 度	111	42 (3)	13	13	9 (2)	2 **	88
29 年 度	101	40 (6)	29	13	5 (1)	2 ***	86(122)

*北海道,東北,東京,一橋,東工,名古屋,京都,大阪,神戸,九州,国公立医学部 **3 年選択者 12 名中 ***3 年選択者 17 名中

○平成 31 年 3 月現在 大学の単位履修制度の設置はしていない。

(3) 生徒の変化について

○外と繋がる学びで生徒の主体性・社会性が高められた。

SGH 指定された 5 年前から本校は、課題研究のための校外フィールドワークを行ってきた。主に県内諸機関・施設を対象に生徒たちが自らアポイントメントをとって、5 人前後のグループで訪問しているが、学校関係のべ 9 カ所、役場などの行政施設のべ 145 カ所、民間企業・個人と合わせるとのべ 701 カ所(平成 30 年 10 月現在)を訪問し、生徒が自ら関係者へのインタビューを行っている。この活動は、生徒達に一定

の主体性と協働して学ぶ姿勢がないと成立しない。どの班もアポイント取りに成功して、インタビューを終えて学びに変えていることは、学校外での学びのカリキュラム開発に成果があったと言える。（（7）に「フィールドワーク協力先一覧」掲載）

平成 28 年度入学生へのアンケートでは、SGH の活動を通じてどのような変化があったかを選ぶ質問に対し、「人前で自分の意見を述べる力が付いてきた」と回答した生徒が 33.5%だったのが、翌年 2 年次後半のアンケートでは、43.1%と 9.6 ポイント上昇している。また「英語での会話や発表への抵抗感が減ってきた」に対しては、29.1%から 48.7%と 19.6 ポイントも上昇している。平成 29 年度入学生も同様の傾向がある。これらの数値の上昇は、社会との連携やグローバルな活動を通じて、主体性・社会性が高まっていることを表しているものとする。（SGH に関わる意識調査（毎年 2 月実施）より）

○グローバルに考え行動する生徒が増加している。

SGH を経験して、大学での留学を考える生徒が増えている。SGH に関わる意識調査において、「大学へ行ったら留学や海外研修をしたいか」の質問に肯定的な質問が増えてきた。1 期生、2 期生については、2 年次に肯定的な回答が減るといった傾向があった。当時は、海外志向を育てているとは言えないプログラムであった。しかし、3 期生が 2 年生になる時期にあたる平成 29 年度から増加に転じた。3 期生は、1 年次 51.8%だったのが、53.8%と 2 ポイント上昇、4 期生は 46.2%だったのが、56.6%とポイント上昇した。着実に海外へのチャレンジへの抵抗が低くなってきていることが見て取れる。校内的には、米国・台湾研修やグローバルな学びを伝える企画が着実に効果を上げているという実感を持っている。

自主的に海外に行く生徒は、過去 5 年間で最多の年間 14 名。在学中に自主的な留学や海外研修に行きたいと考える 1 年生の割合も、過去最高の 68.7%に昇った。（37.3%だった 5 年前から、31.4 ポイント上昇している。）これ以外にも、留学している兄に会いに行く、家族で研修的な要素の強い旅行に行く等、実質学びを目的とした海外渡航は明らかに増えており、海外で学びたいという意欲が強く感じられる。海外に対するチャレンジ精神は確実に育っている。

また本校のアンケートを分析した屋代高校教諭大石超氏や東京大学大学院生榎本智恵子氏の研究から、課題研究と海外志向との強い相関が示されている。本校で海外志向が高まってきたことは、主体性や社会性という高校生の発達段階で高める必要がある能力を引き上げていることを考えれば、よい変化だと考えられる。（大石超氏の報告は、平成 28 年度研究報告書及び平成 29 年度研究報告書に掲載。平成 30 年度研究集録には、大石氏の今年度作成した報告「SGH 指定高校生の主体性の要因」並びに榎本氏の報告を掲載）

○協働して学ぶことに意義を見いだす生徒が増えた。

今年度 2 月、1 年生対象「SGH に関わる意識調査」で、①「友達と協力しながら、自ら積極的に活動できましたか。」と質問したところ、「出来た」「ほぼ出来た」と回答した生徒は 89.2%であった。②「全体としていい授業でしたか。」に対して、76.3%が「良い」「ほぼ良い」と答えている。5 年前と比較してみると、①の値が 70.1%ではあるものの、②が 37.2%と著しく低い。授業カリキュラムが改善されているとは言え、当時「協働して学ぶ」という考え方自体が受け容れられていなかったことが推測される。長野高校生は、与えられた環境・授業スタイルに応じてまじめに取り組むが、授業評価に際しては、まじめにやってきた自分に見合うだけの成果が得られたかで評価していることが多く見受けられる。そのため、今回授業評価が高かったことは、課題研究での協働を成果としてとらえているものと評価できる。校内での聞き取り調査における、ある国語科教員の「『学びは、個人で行うもの』という概念は壊せたのではないか。」という評価も、そのような生徒の変容を裏付けるものと考えられる。

○1 年生、2 年生ともに SGH 活動への評価が上昇した。SGH の意義が広く理解された。

今年度 2 月、2 年生対象のアンケートでは、SGH 全体について、「SGH は、探究的な活動を通して、社会課題に対する関心および課題解決力・コミュニケーション力を身につけたグローバル化に対応した人材を育

成するための国の教育施策です。その意義についてどう思いますか。」との質問に対して、「有意義」、「ほぼ有意義」と回答した生徒の割合が上昇している。平成 26 年度 49.8%だったのが、今年度 70.2%にまで上昇している。1 年生についても、76.3%の 1 年生が総合的な学習の時間を良い授業と評価するなど、授業評価のほとんどが著しく好転している。SGH の意義が広く生徒に理解されたと言える。

(4) 教師の変化について

○教職員対象「学校評価」に係るアンケートにおける教職員の回答を見ると、「十分」と答えた割合は、平成 27 年度 26%、28 年度 41%、29 年度 58%とついに半分を越えた。問いかけた観点は「カリキュラムの開発と実践」であるが、係や総合的な学習担当者以外の教職員が課題研究の開発状況に触れるのは、学年会や職員会の場で議論される教材や指導法についての提案である。課題研究に関わる教材や指導法の開発・改善については、全校への普及を図るために、逐次、学年会や職員会に提案、議論して進めてきたからである。したがって、教職員の評価は直接的にこれら教材や指導法の開発・改善に対するものと考えられ、大半の教職員がこれら进行评估、支持しているといえる。〈平成 29 年度最終評価（2 月回答数 33）【評価項目・観点：グローバル人材の育成「SGH 事業を活用し、グローバル人材を育成するためのカリキュラムの開発と実践に努めている。」】〉（平成 29 年度研究報告書にて報告済み）

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

授業について

○生徒の変容に対する授業の変化

多くの教科科目が、ICT を活用するとともに、SGH 事業で変容した生徒の能力に対応した授業を実践するようになった。主体性及び協働して学ぶ力が高まった生徒の変容への対応をほとんどの教科が行っている。SGH 事業の推進と並行して進められた ICT 環境についても、ほぼ全教員が対応できており、生徒の主体性や発信力をベースに授業を組み立てるように変わってきている。

・実践例 国語 探究型のグループワーク、電子黒板の使用

「問題点の洗い出しを 4 人程度のグループで行う活動などに、SGH で開発した手法を使っている。数年前に比べて、グループワークがスムーズに進むようになった。隣席の友人のつぶやきが自らの思考の体系化や、発想のきっかけになることを、生徒が体験することにより、『学びは、個人で行うもの』という概念は壊せたのではないか。」

・実践例 地理 探究型グループワーク

「グループで、データや情報の比較をして発表する。3 年前までは、実践していなかったが、生徒の様子を見ている中で、『グループでの協働ができる』と判断して、実践してみたところうまく機能した。」

・実践例 数学 生徒による問題解説・問題の意味の説明

「以前も問題解説をさせていたが、前に出て話すことへの抵抗がなくなっている。数学では、正しいか間違いかがはっきりしてしまうため、自分の答えを説明する作業に対して生徒は消極的であったが、自らの考えを示してくれるようになったので、理解度を測りやすくなってきている。授業の中でも（問題の解法だけでなく）そもそも「なぜこれを問うのか」といった本質を問うことができるようになり、それに対しても今の生徒は答えようとするので、さらに理解度を測ることができる。」

・実践例 生物 英語論文を扱った活動、グループワーク

「生物に関する英語論文を読ませて、グループごと担当した分野についての発表を行う。実践的な英語に慣れてきたこと、グループワークにも主体的に取り組む姿勢から実践が可能だと判断した。生徒たちは、積極的に取り組んでいる。」

・実践 保健体育 探究型のグループワークと発表活動

「以前から調べ学習と発表という活動は行っていた。SGH 開始後から、課題設定において進歩が見られる。発表のプレゼンを見ても、仮説を元に展開する「SGH 的手法」で考えており、発表内容にも深みが出てい

る。明らかに SGH の効果と言える。」

以上のような実践例の増加に加え、県内の教員に対する、長野高校の職員の変化を尋ねた調査(平成 30 年 12 月実施)においても、「ICT 活用スキルを活用する能力が上がっている」(61.1%)「課題研究の指導スキルが上がっている」(55.6%)、「探究的な学びを意識した授業が増えている」(50%)「学校運営で協働して問題解決する力が上がっている」(44.4%)と評価されている。

○電子黒板やクラウド等の ICT を有効に活用できるようになった。

この5年間で長野高校の ICT 環境は、大きく変わった。平成 26 年度当時、授業でパソコンを使うことはあったが、インターネット活用を前提とした授業は多くなかった。情報の要素を取り入れた PBL 型英語授業では、台湾の高校生パートナーと発表内容を共有するため、インターネット環境、とりわけクラウドを活用できる状態にする必要があった。また平成 29 年度には、普通教室に電子黒板が一斉に導入された。これにより、教員の平均年齢が 54 歳と高い本校においても、電子黒板の普及は速やかに行われた。導入後 1 年も経たないうちに、ほぼ全教員が使いこなしている。平成 30 年 12 月に、SGH 指定前から現在まで長野高校で勤務する教諭 20 名全員を対象に「職員の変化について」を問うアンケート調査を実施したところ、電子黒板等を使うスキルについては、95%の対象職員がスキルの向上を実感していた。

本校では、SGH 指定を受けた平成 26 年度より、Google for Education を段階的に導入してきた。海外との交流事業や協働を前提とした課題研究においては、もはやなくてはならないインフラになっている。英語科職員や SGH 推進室職員を中心に、Google の有効な活用法を研究して、校内にも有効に活用できる職員が増えている。教科での利用も広まっており、授業での補助教材の提供(生物)や探究型学習での発表(保健、世界史)英作文での添削指導など実践例が増えている。

長野高校の実践を、平成 31 年 2 月 2 日に長野市ホクト文化ホールで行われた e スクールステップアップ・キャンプ 2018「東日本大会」において報告した。生徒・教員での共同発表において、代表発表した生徒からも、「理解に役立っている」との報告がなされた。

○「海外研修やプロジェクト型など、かつてはなかった文化が育っている。」

平成 30 年 6 月 22 日 職員研修会「課題研究と海外研修のこれから」において、平成 26 年度～28 年度まで長野高校で国際交流アドバイザーを勤めた大宮透氏(一般社団法人小布施まちイノベーション HUB 事務局長)は、「文化を醸成するのに 5 年という期間は十分だった。海外研修やプロジェクト型など、かつてはなかった文化が育っている。」と、英語の授業に、プロジェクト型学習が導入されていること等を評価した。

保護者について

(保護者評価「学校評価」に係るアンケート 平成 29 年度最終評価(2 月回答数 199)【評価項目・観点:グローバル人材の育成「SGH 事業を活用し、グローバル人材を育成するためのカリキュラムの開発と実践に努めている。」】の考察より)

○本校のカリキュラムでは、2 年次末で全員での課題研究が終了する。その時期の保護者の回答を見ると、平成 28 年度は、年度当初の過密スケジュール等から生徒に負担感があり、保護者の「十分」の評価も 21%と平成 27 年度より 6 ポイント下がっていたが、29 年度には 30%と 27 年度よりも高くなっており、「概ね」も合わせれば 79%の保護者がカリキュラムを妥当なものと評価している。これは、年度当初のスケジュールの改善やテーマ設定期の丁寧な指導等により、負担感が軽減し積極的に取り組む生徒が増えたことが保護者の評価にも反映しているものと考えられる。

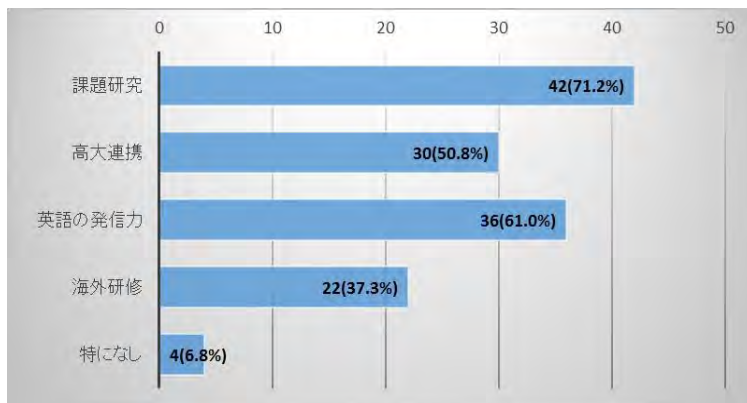
また、今年度からは、保護者を対象とした行事の際に SGH 事業について語る場面を増やしたことも功を奏していると言える。(平成 29 年度研究報告書にて報告済み)

(6) 課題や問題点について

課題1 地域にグローバル教育を根付かせること

本校では、SGH推進室、授業担当者、班担当など全職員で課題研究に関わる指導体制が確立されている。1・2年生とも、「総合的な学習の時間」は、隔週2時間連続の授業において、時間割内で実施することで、成果を上げている。全校生徒を対象とする本校のSGH事業は平成28年度末の中間評価で、A評価と高く評価されている。今後の課題は、探究的な学びのリーディング校として、長野県が2030年までに目指す「子どもから大人まですべての県民が主体的に学び、個々の持つ能力を社会の中で発揮している学びの県」(長野県SDGs未来都市計画より)に貢献することである。

右の表は、長野高校の変化についての調査(平成30年12月に、長野県すべての公立高校にアンケートフォームを送信し実施。59校より回答。)において、「長野高校は、5年間のSGH事業の成果を普及することを考えています。どのような内容を普及して欲しいですか。」との設問に対する答えである。地元の小中学生に県下トップの進学校であるという役割を引き続き果たすとともに、高校間では、「課題研究」「英語の発信力」を普及することで地域のグローバル教育の普及に努めることが、5年間SGH事業を行った学校の使命だと考える。



課題2 地域の企業・大学・公的機関・同窓会の支援を結集して、コンソーシアムをつくること

SGH指定された平成26年度から本校は、学校関係のべ9カ所、役場などの行政施設のべ145カ所、民間企業・個人と合わせるとのべ701カ所を訪問し、関係者へのインタビューを行っている。大学においては、フィールドワーク先としてだけでなく、本校の英語プレゼン大会に、毎年30名近くの学生・教授の方々に助言者として来校いただいている。特に、信州大学工学部・教育学部、長野県立大学等、グローバル教育に対して意識の高い支援者に支えられ、5年間その発表レベルは年々上がっている。管理機関である長野県教育委員会から指導・助言を絶えず受け、SGH事業の充実を図るとともに、長野県庁の各部局・長野市役所等の公的機関及び同窓会(金鷄会)からも支援を受けることで、充実した探究学習を展開できている。

今後の課題は、このような地域の支援を結集し、さらに地元以外からの有効な支援を受けられるような2層構造の連携体制を作ることで、教育機会の拡充を図っていくことである。地方創生を担うグローバル人材育成のためには、さらなる教育の質的転換と学びの充実を図る必要がある。

課題3 異文化体験を通じて、海外で学ぶのに資する英語力(国際的な対話力)を身につけること

本校は、SGH指定以来、台湾研修旅行を行い、高雄市政府教育局、市内高級中学からの全面的な協力のもと、本校生徒のファシリテーションによる現地校との会議形式の交流を行っている。今年度は、高雄市のプレゼン優秀者が本校を訪問しての発表会が企画されるなど、本校は現地で高く評価されていることがうかがえる。実際に、本校は、「ICT交流に特長がある交流を行う学校」として、高雄市の現地メディア(港都新聞、自由時報等)で毎年報道されている。

一方、連携先である立命館アジア太平洋大学の横山研治副学長が「世界の平均的な英語力は上がっており、日本と海外との差が開く一方である。」と述べていることから、英語力の養成は急務である。加えて、グローバル社会に適應できる人間的成長を促すキャリア教育と日常的に異文化に触れる環境づくりが必須である。

榎本智恵子氏(元JICA長野デスク、現東京大学大学院生)が、「高校生のグローバル・マインドセット調査」(平成31年1月24日(木)2年生78名に実施)の分析をした結果、海外経験含む異文化体験が多い生徒は、課題研究への興味が高くなる傾向が明らかになった。さらに、課題探究が好きな生徒ほど相互理

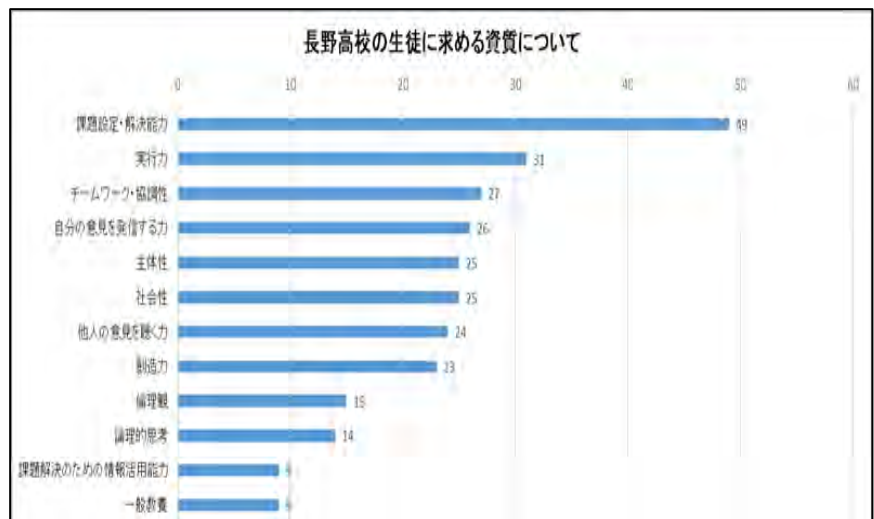
解含む多面的思考ができ、行動までをイメージした具体的なビジョンを描けることも明らかになった。榎本氏によると「高校生の自主的な海外渡航や学校の海外プログラム実施には様々な制限がある。その代替として、地域に暮らす外国人との交流体験や異文化体験の機会を増やすことで、探究的な学びへの積極的姿勢が涵養されるのではないかと考える。」とのことである。異文化体験の機会を増やすべきという榎本氏の提言を、次年度以降の長野高校の教育に活かしていく必要がある。(平成30年度研究報告書巻末に榎本智恵子氏「長野県長野高等学校における生徒のグローバル・マインドセット— 2019年1月実施の調査に関する中間報告—」を掲載)

課題4 長野高校が社会に求められる発展的な課題設定・解決能力などの能力を育成する

この5年間で長野高校は様々な能力を開発するカリキュラムを開発してきた。今年11月に、SGH導入以前から在職している教員20名全員に行った校内アンケート「SGH指定前後アンケート」では、コミュニケーション能力・協働して学ぶ姿勢・プレゼンテーション能力について、能力育成に「効果があった」との回答が多く、特に英語のプレゼンテーションについては20人中、わからないと答えた2名を除き、残り18人が「効果があった」と回答している。その他のスキル開発に関しても、教員・生徒ともに実感している。2014年に経団連が行った調査「企業が学生に求めるスキル」で、上位とされた「コミュニケーション能力」「主体性」「チームワーク協調性」について、十分に育成に努めてきた。

一方、今年度、フィールドワーク先の地元企業に経団連と全く同様の形で「企業が長野高校生に求めるスキル」を聞いたところ、「課題設定・解決能力」が最も求められていることが明らかになった。これまでの課題設定・課題解決についても、「高校生としては十分能力が高い」と、外部評価を受けてきた。しかし、フィールドワークでの気づきを大切に課題

設定の指導を行ってきた分、最終的な課題解決(提言)に説得力があるとは言えない研究も見られた。課題分析の段階での大人との関わりを増やし、海外での体験や学校外とのつながりを事前に見越しながら課題設定をするなどの改善をしながら、地域の課題解決に向けた、より高度な「課題設定・解決能力」を育成する必要がある。



(7) 今後の持続可能性について

2019年度以降についても、SGHで開発してきたプログラムを継続できる。指定期間以降の生徒にも、SGHカリキュラムで開発できる能力を育成する機会を与えるとともに、時代と環境に合わせてさらに発展させていく予定である。長野高校では、世界中の人と連携をして問題解決ができるグローバル人材を育成する。

ポストSGH方針

- ・長野高校生が地域創生に向けて、効果的な協働を通じて主体的に活動することで、長野県が掲げる「SDGs 未来都市・学びの県」にふさわしいグローバル人材育成の場を創造する。(成果の普及・成果の波及)
- ・PBL型の英語教育と教科横断型の学びを通じて、グローバル視点のキャリア観を段階的に育てることで、グローバルファシリテーターとしての資質を養う。(キャリア教育)
- ・「長野県SDGs未来都市計画」の実現による地方創生に向けたコンソーシアムと協働し、レイヤー的思考、ブレイクスルー的発想、国際的な対話力を育成するカリキュラムを開発し、生徒の探究的な学びの質を高め、実効性の高い政策提言をできるようにする。(新たな能力開発)
- ・現在コンソーシアムの形成を進めるとともに、周辺地域外にも連携先を拡げている。

〈コンソーシアム予定 3月6日現在〉

- ・長野市・長野県企画振興部総合政策課
「SDGs 未来都市」構築へ向けた「SDGs 未来都市宣言」を掲げている長野県とともに、地域のためにより良い協働を行う。グローバルな体験の場を提供。SDGs 事業相談、海外交流支援。
- ・信州大学教育学部・信州大学工学部
大学講師・学生による支援で生徒への教育効果を高める。プログラミング等、新しい学びの実践をともに研究開発する。
- ・長野県立大学（連携協定締結予定）
徒歩5分の距離を活かして、両校の学生・生徒が恒常的に連携する探究学習を実施し、高大連携を実践。課題研究、合同発表会の開催。
- ・東京海上日動火災保険株式会社
「SDGs 学習」の導入、探究学習におけるデータ活用の授業を協働で研究開発する。その他、授業やフィールドワークのコーディネート。
- ・J C（長野青年会議所）
社会人と協働した事業を提供してもらうことで、学校及び生徒が実行するプロジェクトの成果を出しやすくなる。事業支援、企画相談、留学生受入相談。
- ・金鷄会（同窓会）
卒業生の教育支援により、学校及び地域に学びを還元することで、学校及び地域の教育力を高める。施設拡充のための支援、講師派遣、外部への発信。
- ・長野県教育委員会
事業全般に関わる恒常的な助言。予算措置を明記する。支援員の配置。ALTの増配。

〈コンソーシアム外の連携先〉

- ・京都大学(京都大学高大接続東海圏高等学校ネットワーク加盟校として協定)
長野高校生の知的好奇心を引き出す役割を期待。学生派遣、京都大学での発表会。
- ・地域協働推進連携校
上田、飯山、屋代各高等学校及び上田染谷ヶ丘、長野西高等学校の国際教養科で構成。合同での研修・発表会を開催。
- ・立命館アジア太平洋大学（APU）（2019年度より連携協定締結予定）
多文化共存を実現した学校教育が地方創生に大きな影響を与えたモデルとして、職員への研修を行うとともに、生徒に多文化共生のビジョンを提供する。WEBによる留学生インタビューの実施、サマースクールへの派遣。
- ・高雄市政府教育局(長野県教育委員会との間に、教育交流協力に関する覚書の締結)
毎年、初の海外交流を不安に思う教員・生徒たちが多く、絶えず温かく迎え入れてくれるため、その学校交流のコーディネート力に対する校内からの信頼は厚い。

○フィールドワーク協力先一覧(平成26年度～平成30年度まで) 太字は複数機関による協力

1166 バックパッカーズ, ANPI(公益財団法人長野県国際化協会), E-NAGANO スポーツクラブ, English For You, G&E かんばにい, HanaLabo. (ハナラボ), HAWAIIAN DINER Mauntain Q, India Live the SKY, JA グリーン長野川平島共選所, JA ながのうえまつ農産物直売所, JA 須高, JA 全農(全国農業協同組合連合会長野県本部), JA 中野市きのご販売課, JA 長野県営農センター営農企画グループ, JA 長野厚生連 篠ノ井総合病院, JA 長野厚生連 長野松代総合病院, JICA 駒ヶ根, JICA 駒ヶ根長野デスク, JR 東日本長野支社, JTB 長野, K&F コンピュータサービス, NHK 長野放送局, NIKKI Fron 株式会社, NPO ホットライン信州, NPO 地域づくり工房, NPO 法人 IT サポート銀のかささぎ, NPO 法人たかやしろ, NPO 法人まめつてえ鬼無里, NPO 法人みどりの市民, NPO 法人信州フォレストワーク, NTT インフラネット, RIZAP 長野店, SBC 信越放送, THE SAIHOKUKAN HOTEL, あづみ堂, あまかざり工房, アメリカンドラッグ, いでうら内科クリニック, いろは堂, ヴィラデストガーデンファームアンドワイナリー, エムケー精工 株式会社 管理本部, オブセ牛乳, おぶせ物語, おもてなしイタリアン和伊ん, おやき屋総本家, おやき協議会, おやき村長野分村大前店, オリオン機械 株式会社, オリオン精工 株式会社, オルガン

針 株式会社, カフェテラス モモ, カフェフルーリー, ガレリア表参道, キッセイ薬品工業 株式会社, グリーンヒルズ小中学校, グリーンフード 株式会社, クリエイティブファクト 株式会社 (寺島デザイン室), こばやしフルーツ, サカイエフキューブ 有限会社, サクラ精機 株式会社, サンアップル, しの鉄道 御代田駅, ジョブカフェ信州長野分室, セイコーエプソン 株式会社, セーラマリカミングスさん, ぜにがめ堂, そば茶屋極楽坊, ソフトバンク長野東口, ダイニングフタリヤ, タイラーリンチさん, デイサービスさふらん, デリクックちくま, デリシア軽井沢店, デリシア七瀬店, トライアン 株式会社, ドライフルーツ専門店 ripe, ながの法律事務所, なべくら高原森の家, ノエルキッチン, のぶしなカンパニー, ハイウェイオアシス小布施総合公園, ハローワーク長野マザーズコーナー, ビッグハット アリーナ&若里市民文化ホール, ビュッフェ居酒屋パール, ビラールモスク長野, フードバンク信州, フォレストデザイン, ふきっこおやき, プラトウハヤシヤ, フリースクールブルーム, ブルーベリー農園「森の畑」, ベーグル屋ハル, ベルジュ, ホクト 株式会社, まいさば長野市, まちくらしたてもの案内所, まちづくり長野, マツモトキヨシ, ミナミ薬局, ミヤマ 株式会社, ミヤリサン製菓 株式会社, ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン, ラーメンるるも長野駅前店, ライズインターナショナル, ライブハウス インディアインザスカイ, ライブハウス J, リファール総合計画, りんごの木 青木島本社工場, ローソン長野 SBC 通店, わかまつ呼吸器内科クリニック, 愛和病院, 杏っ子の里ハーモアグリ, 医療法人平成会 小島病院, 一般社団法人 安曇野観光協会, 一般社団法人 戸隠観光協会, 一般社団法人 日本雪合戦連盟, 一般社団法人長野県観光機構, 栄心堂, 栄村役場 震災復興祈念館「絆」, 塩屋醸造, 横島物産, 臥竜公園管理事務所, 学校法人信学会 駿台提携長野予備学校, 株式会社 MYROOM, 株式会社 NTT DATA 信越, 株式会社 WAKUWAKU やまのうち, 株式会社 アイテックノ矢嶋, 株式会社 エムウェーブ, 株式会社 クリエイティブヨーコ, 株式会社 サンクゼール, 株式会社 ちくま精機, 株式会社 ニチイ学館 長野保育事業所, 株式会社 ニットー, 株式会社 マルイチ産商, 株式会社 ミールケア みーるんヴィレッジ, 株式会社 みすずコーポレーション, 株式会社 ミマキエンジニアリング, 株式会社 リファール総合計画, 株式会社 ロゴス, 株式会社 羽生田鉄工所, 株式会社 環境技術センター, 株式会社 匠電舎, 株式会社 竹内製作所, 株式会社 長印, 株式会社 長野パルセイロアスレチッククラブ, 株式会社 未来農業計画 森の畑, 株式会社 綿半ホームエイド, 鬼無里診療所, 喫茶信濃路, 宮後工業 株式会社, 旧軽井沢銀座通り商店会, 郷土料理評論家 横山タカ子さん, 玉照院, 栗田病院, 群馬大学 次世代モビリティ社会実装研究センター, 軽井沢観光協会, 軽井沢観光振興センター, 軽井沢町役場 観光経済課, 健命寺, 権堂商店街共同組合, 限界集落一番, 古里総合市民センター, 戸隠観光情報センター, 戸隠森林植物園, 戸隠神社, 戸隠地質化石博物館, 公益財団法人 ながの観光コンベンションビューロー, 公益財団法人 長野県体育協会, 更北地区 丹波島区区長, 高山村観光協会, 高山村保健福祉総合センター, 高島陽子県議会議員, 国営アルプスあづみの公園 大町・松川管理センター, 国土交通省 関東地方整備局 長野国道事務所, 国土交通省 北陸地方整備局 千曲川河川事務所, 信州上田医療センター, 東長野病院, 黒姫童話館・童話の森ギャラリー, 佐久総合病院 佐久医療センター, 佐久大学 田中教授, 桜井甘精堂, 山ノ内町・小石屋旅館, 山ノ内保健センター, 山口利幸先生, 志賀高原自然保護センター, 自衛隊長野地方協力本部, 自然エネルギー信州パートナーズ, 社会医療法人財団 慈泉会 相澤病院, 社会福祉法人 森と木, 社会福祉法人 長野りんどう会, 若穂食肉加工施設, 寿製菓 株式会社, 春蘭の宿 さかえや, 歴史の宿金具屋, 渋温泉旅館組合, 旬彩菓たむら, 小さな宿 sinra, 小岩井紳工房, 小川の庄大門店, 小川村保健センター, 小川村役場, 小布施ガイドセンター, 小布施町 工藤陽輔さん, 小布施町観光協会, **小布施町役場** (企画政策課, 商工振興課), 小布施町立 栗が丘小学校, 小布施町立 小布施中学校, 小布施堂本店, 小布施文化観光協会, 松川村役場, 松本市野球場, **松本市役所** (観光温泉課, 人権・男女共生課 多文化共生プラザ), 松本大学 人間健康学部 健康栄養学科, 上田市観光会館, **上田市役所** (商工観光部 観光課, 政策企画部 移住定住推進課), 上田市立博物館, 上田城, 上田保健福祉事務所 乳肉動物衛生係, 城下医院, 浄光寺スラックラインパーク, 信越自然環境事務所, 信越病院, 信学会 上田南幼稚園, 信更果実流通センター, 信州キャンペーン実行委員会, 信州子ども食堂ネットワーク, 信州スポーツスピリット, 信州フォレストワーク, 信州高山アンチエイジングの里 スパ・ワインセンター, **信州大学【教育学部** (阿久津教授, 現代教育コース, 高崎研究室, 社会科研究コース, 酒井英樹研究室, 心理学科 鈴木俊太郎研究室, 心理学科 越智教授, 心理支援教育コース, 水口先生, 石澤研究室, 田中敏研究室, 附属次世代型学び研究開発センター, 伏木研究室), 経法学部 井上信宏教授, **工学部** (機械システム工学科, 建築学科, 航空宇宙システム研究センター, 山崎公俊先生, 図書館グローバルカフェ, 水環境・土木工学科 藤居研究室, 電子情報システム工学科 阿部研究室, 電子情報システム工学科 丸山稔研究室, 電子情報システム工学科 香山瑞恵研究室, 高山潤也准教授), 人文学部 社会心理学コース, **繊維学部** (応用生物科学科, 高橋伸英教授), 全学教育機構, 大学院 総合理工学研究科】, 信州大学医学部附属病院, 信州大学教育学部附属松本中学校, 信州大学教育学部附属長野小学校, 信州大学教育学部附属長野中学校, 信州大学附属特別支援学校, 信州中野シャインマスカット園, 信濃教育会, 信濃町観光協会, 信濃町役場, 信濃町立信濃小中学校, 新光電機工業 株式会社, 諏訪東京理科大学 工学部, ゲストハウス蔵, 須坂市水道局 上下水道課, 須坂市保健センター, **須坂市役所** (まちづくり課, 健康福祉部 健康づくり課, 商業観光課, 政策推進課), 須坂市立図書館, 須坂市立博物館, 須坂病院, 杉の子アピック保育園, 菅平高原国際リゾートセンター, 裾花峡天然温泉宿うるおい館, 成田かついさん, 星野リゾート ホテルプレストンコート, **清泉女学院大学** (心理コミュニケーション学科, 人間学部 文化心理学科, 石井国雄先生), 清泉女学院短大 武田研究室, 西宮神社, 青木固研究所, 千曲市役所 更埴庁舎,

千曲川リバーフロント、千曲乃湯 しげの家、川上村役場 産業建設課 農林係、川中島古戦場(八幡原史跡公園)、善光寺、善光寺宿坊組合/淵之坊、善光寺大本願、早稲田大学 中澤篤史先生、草笛 長野本店、大王わさび農場、大信畜産工業 株式会社、大町市立大町山岳博物館、大福屋、地域おこし協力隊 丸増、地域おこし協力隊 水谷翔さん、地縁団体 野沢組惣代事務所、地獄谷野猿公苑、竹重病院、竹風堂、筑北村役場、中山晋平記念館、中条フルーツ農場、中部森林管理局 技術普及課、中部電力長野電力センター、中野市役所 文化・スポーツ振興課内信州なかの音楽祭実行委員会事務局、朝陽学園幼稚園、長喜園、長電タクシー 株式会社、長電バス 株式会社、長野ひまわり幼稚園、長野医療専門学校 音楽療法士学科、長野駅観光センター、長野経済研究所、長野県 NPO センター、長野県 PTA 連合会、長野県スキー連盟、長野県屋代高等学校、長野県果樹試験場、長野県介護福祉士会、**長野県環境保全研究所** (安茂里庁舎 水・土壌環境部、飯綱庁舎)、**長野県教育委員会** (教学指導課、保健厚生課、心の支援課、スポーツ課体育スポーツ振興係)、長野県経営者協会、長野県建築センター (善光寺木遣り保存会)、長野県工業技術試験センター、長野県工業技術総合センター、長野県更級農業高等学校、長野県上田高等学校、長野県信濃美術館、長野県精神保健福祉センター、**長野県短期大学** (健康栄養専攻 吉岡研究室、多文化コミュ 安井研究室、築山秀夫先生)、長野県中小企業振興センター、長野県中小企業団体中央会、**長野県庁【環境部** (環境エネルギー課、環境政策課、資源循環推進課、自然保護課)、**観光部** (観光誘客課、国際観光推進室、山岳高原観光課)、**企画振興部** (総合政策課、地域振興課)、危機管理部 危機管理防災課、**健康福祉部** (医療推進課、介護支援課、健康増進課、健康福祉政策課、障がい者支援課 社会生活係、食品・生活衛生課、薬事管理課)、**県民文化部** (こども・家庭課、国際課、長次世代サポート課、人権・男女共同参画課、文化政策課)、**産業労働部** (産業政策課、労働雇用課)、総務部 職員キャリア開発センター、**農政部** (園芸畜産課、農業技術課、農業政策課 農産物マーケティング室)、**林務部** (信州の木活用課 県産材利用推進室、森林づくり推進課 鳥獣対策・ジビエ振興室、森林政策課)】、長野県長寿社会開発センター、長野県長寿食堂、長野県長野西高等学校、長野県動物愛護センター ハローアニマル、長野県農業試験場、長野県農村工業研究所、長野県飯山高等学校、長野県保健福祉事務所、長野県民新聞社、長野県立須坂病院、**長野県立大学** (学生サポートセンター、健康発達学部 食健康課 草間かおる准教授)、長野県立歴史館、長野県猟友会、**長野工業高等専門学校** (環境都市工学科、電気電子工学科)、長野市ガイド協会、長野市ものづくり支援センター、長野市議会議員 望月義寿事務所、**長野市教育委員会** (家庭・地域学びの課、学校教育課)、長野市芸術館、長野市公文書館、長野市上下水道局 浄水課、長野市城山動物園、長野市清掃センター、長野市第三学校給食センター、長野市地球温暖化防止活動推進センター、長野市中条支所 中条地区住民自治協議会、**長野市保健所** (健康課、食品生活衛生課)、長野市民病院、**長野市役所【環境政策課、観光振興課、企画課、企画政策部 交通政策課、危機管理防災課、戸隠支所、行政管理課、商工観光部 観光振興課、障害福祉課、人権・男女共同参画課、生活環境課、都市計画課、都市政策課、農林部** (いのしか対策課、森林整備課)、秘書課 国際室、**文化スポーツ振興部** (スポーツ課、文化芸術課)】長野市立芹田小学校、長野市立三輪小学校、長野市立城山小学校、長野市立信里小学校、長野市立裾花小学校、長野市立長野高等学校、長野市立鍋屋田小学校、長野市立博物館、長野市立柳町中学校、長野自然環境事務所、長野女子短期大学、長野森林資源利用事業協同組合 いいづなお山の発電所、長野森林組合長野支所、長野神社庁、長野人権啓発センター、長野整形外科クリニック、長野赤十字病院、**長野大学** (京谷研究室、山崎研究室、社会福祉学部 社会福祉学科)、長野地域振興局 林務課 林務係、長野地方家庭裁判所、長野地方気象台、長野中央病院、長野電鉄 株式会社、長野日本無線 株式会社、長野保健福祉事務所、長野労働局 雇用環境・均等室、鳥羽医院、天山小路・山路 (布遊舎)、湯へばれあ、湯田中温泉・渋温泉、湯本旅館、藤木庵、道の駅信越さかえ、特定医療法人新生病院、特別養護老人ホーム ローマンうえだ、南長野医療センター新町病院、日本きのこマイスター協会、白馬村教育委員会事務局スポーツ課、白馬村役場、八十二銀行本店、八幡屋礒五郎、反貧困ネット長野、飯綱町役場、飯山 ふるさと館、飯山駅観光交流センター、飯山市・明石仏壇店、飯山市・有限会社阿部製紙、飯山市自然アクティビティセンター、飯山市服部農園、飯山市役所、飯山城址公園、飯山食文化の会 味蔵月あかり、飯山赤十字病院、飯山伝統産業会館、不二越工業 株式会社、富士通長野支社、富士電機 IT ソリューション 株式会社、武田塾 長野駅前校、風景館、風土 Link、別所線別所温泉駅、保護猫カフェ ARO、北信総合病院、北村農場、北野建設 株式会社、麻績村役場 村づくり増進課、味ロジックわくわくさかき、木島村役場 移住定住増進係、門前農館 有限会社さんやそう、野村ユニソン株式会社、野沢温泉観光協会、野沢温泉村役場、矢島歯科医院、有限会社 大丸、竜王マウンテンパーク、老人ホームあたご

長野高校は、この報告を通じて、これまでの多くの支援への感謝の意を表明するとともに、この強力なコミュニティの支援のもとならば、さらなる協働を通じて、今後もグローバル教育、グローバル人材育成の事業を継続していけると確信している。

【担当者】

担当課	長野県教育委員会事務局 教学指導課	T E L	026-235-7435
氏 名	小川 幸司	F A X	026-235-7495
職 名	主任指導主事	e-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp